

10周年記念企画

授業実践報告 (インタビュー)

京都の歴史・文化を視覚的に表現する

下嶋 篤 (視覚表現研究室)
鋤柄 俊夫 (歴史文化情報研究室)
柳沢 英輔 (音文化研究室)

学際的なテーマに文理の両面からアプローチ

3年生の「ジョイント・リサーチ」は、文理の分野が異なる複数の教員の下で、グループ単位で共同研究を行う探求型の授業です。下嶋、鋤柄両教授と柳沢助教の受け持つクラスでは「京都の歴史・文化を視覚的に表現する」をテーマに20人の学生たちがWebの作成に取り組んでいます。

下嶋教授は、もともと同志社大学で哲学を学び、米国留学を経て、地図やグラフ、絵などのグラフィック表現を科学的に分析する研究領域に行き着きました。また、同志社大学大学院文学研究科を修了した鋤柄教授は日本中世社会の考古学的研究のスペシャリスト。一方、柳沢助教は京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科を修了し、最近では京都の音文化について研究を進めています。4年前から下嶋、鋤柄両教授が「ジョイ

ント・リサーチ」を始め、今年から柳沢助教が教授陣の輪に加わりました。

「ジョイント・リサーチ」は、学際的なテーマについて研究を進めながら文理の両面からのアドバイスによって、より柔軟で、視野が広く、深みのある研究に取り組むことができるのが魅力。学生たちは、認知科学と論理学に裏づけられたグラフィック表現理論の下嶋教授と、歴史学や考古学に精通し歴史遺産の数量化・デジタル化研究にも明るい鋤柄教授、音と文化の視点からフィールドワークを展開する柳沢助教の3人による個性的なジョイント講義から大いに刺激を受けて、新たな視座を築いています。

Web制作の基礎学習と「人・もの・場所・音・物語」

学生たちは春学期の4月から9月まで、下嶋





教授と鋤柄教授・柳沢助教がそれぞれ担当する2班に分かれ、交互に Web 制作の基礎と京都の歴史・文化を理解するための学習に励みます。

下嶋教授の班では、京菓子や京町家などの歴史的な調査結果を Web ページでアウトプットするために必要なレイアウトやナビゲーション設計、デザイン手法などを学びます。また、実際にある関連事項の Web ページを対象に、情報発信の方法のほか、視線計測調査で受け手にどう読まれているか、理解は深まっているかなどについてパソコンを使ってデータサイエンスの手法で調査・分析します。

また、鋤柄教授・柳沢助教の班では、「人・もの・場所・音・物語」と題して、京都の歴史・文化を短い文章と画像、音を使ってストーリー仕立てにまとめ上げる作業が続いています。舞妓さん、小野篁、知恩院と二条城などテーマは様々ですが、パワーポイントを使って Web ページを意識したコンテンツを創作します。

コンテンツと表現を両輪とした人材育成に期待

学生たちは、10月以降には1つのクラスとして3人の教員の指導を受けながら、ドリームウィーバーを使って3、4人のグループがそれぞれ自分たちの Web ページを作ります。完成前に

はドラフトを作成して視線計測で最終点検、必要などところに修正を加えて仕上げます。

この授業では、京都の歴史・文化に興味がある学生と視覚的な表現や認知科学が好きな学生がいて、関心領域が少しずつ異なる異種混合になっています。それらが、学際的な出自の違う3人の教員の指導でモチベーションが高まり、それぞれの関心領域を超えて文理の区別なく共通した理解が深まっていきます。また3、4人構成のグループの中に、歴史・文化組と視覚表現組が適切に配分されているのも相互の共通理解が深まる助けになっています。

この「ジョイント・リサーチ」の授業を通して、文化と科学の土台の上にコンテンツと表現が両輪として組み込んだ人材が育つことが期待されています。

「京都の歴史・文化を視覚的に表現する」をテーマに「ジョイント・リサーチ」を指導している教員らが研究者として首尾一貫して関心を持っているのは歴史上の図解表現であり、グラフィックと歴史との出会いです。その中には人体図や絵巻、挿し絵などかつて使われてきた面白い技法があり、下嶋教授は「それらの認知的効果についても研究を深めてみたい」と話しています。